

アクセントからみた長唄 《英執着獅子》と 《越後獅子》

坂本清恵・配川美加・高桑いづみ・星野厚子

一 これまでの長唄アクセント研究

日本の伝統的な歌は、日本語のアクセントが音の高さを利用したものであるところから、言葉のアクセントに合うように歌われてきた。謡や浄瑠璃もアクセントに合った節付けがされてきた。アクセントは時代によって変化し、また地域によって異なるが、節付けは作曲当時のものが譜に残されるため、古いアクセントが伝承されていることもある。

近世音曲は、江戸で作曲されたものであっても、上方アクセントがとどころに聞かれ、音曲の世界では上方アクセントが標準アクセントと考えられていた。長唄については、江戸時代の譜がなく、多くの曲が小十郎譜からなるため、本格的なアクセント研究がなされてこなかった。

長唄のアクセント研究については、金田一春彦「邦楽の旋律と歌詞のアクセント」『東亞音楽論叢』昭和十八（一九四三）年から始まったと言っ

てよい。

金田一氏によって長唄のアクセントについては次の三点が指摘されている。

- 1 長唄は東京アクセントを基準とする
- 2 長唄は語句のアクセントを尊重するあまり、語句のアクセントが変わると旋律も変わる
- 3 長唄のアクセントが尊重されるようになったのは、明治の頃、吉住小三郎からである

この他に、浅川玉兎「長唄の実技と理論 唄篇」『楽理と実技 長唄の基礎研究』（長唄友の会発行 昭和三十七（一九六二）年）では次のように述べられている。

普通の言語に於ては、関東と関西とで語勢すなわちアクセントの異なる場合が多いが、唄ではそれぞれ一定の節がついていて、多くの場合は節付そのものが江戸弁のアクセントになつてゐるから、普通の言語ほどにはアクセントの重要性は認められないが、江戸長唄と

いう名称の通り、江戸が本場である以上、地方の人々もつとめて東京弁のアクセントを用いることを心掛けねばならない。従つてどちらにでも唄える様な場合には、勿論江戸なまりに発音するし、そうでない場合でも出来るだけ江戸弁の語勢に聞える様に唄うことが必要である。

一例をあげるならば、「春の色」「秋の夕」等の語に於て、春・秋はいずれも関西では「ハル」「アキ」という風に太字の後の文字にアクセントがつくが、節付に対しても無理が伴わない限りは、どこまでも「ハル」であり「アキ」でなければならぬ。

いずれも長唄のアクセントは東京アクセントが反映していることを強調している。しかし、長唄の曲によっては、上方で作曲されたものもあり、かならずしも東京アクセントを反映していないことがわかってきた。金田一氏が3に掲げているが、小三郎以前の演奏には東京以外のアクセントも混在していることだろうか。

坂本清恵(二〇一五)「長唄のアクセント―「鶴亀」を例に―」『論集』11では、金田一氏が2の根拠としてあげた、長唄《鶴亀》に現れる「瑠」のアクセントについて検証し、金田一氏の説が実態と合わないことを指摘した。金田一氏は次のように述べている。

長唄の旋律は歌詞のアクセントを尊重するあまり、ある語句のアクセントが変化を起すと旋律も従つて変化することがあるやうである。先日私のもとに居るものが、近所の長唄の師匠―杵屋六左衛門氏の系統と言ふ―の所へ行つて「鶴亀」を習つて来たが、聞いてみると、「碑礫のユキ柎、瑠瑠の階」と言ふ所を例(22)〔篇末参照〕のやうに歌つてゐる。是は小十郎氏の譜には例(23)〔篇末参照〕のやうに出てゐるものである。此の「瑠瑠」なる語は山田美妙齋の

「日本大辞書」には勿論のこと、神保格先生の「アクセント辞典」にも放送局編の「アクセント辞典」にもメノオと出て居るくらゐで、メノオと言ふアクセントは東京で極く新しい時代に出現したものと考へられる。此のメノオノハシと言ふ節は、私の近所の師匠が発明したのか、その又師匠が発明したのか明らかでないけれども、兎に角此のやうな随分新しいアクセントの変化が、既に長唄の旋律に変化を及ぼすことは注目に値すると思ふ。(譜は省略)

しかし、《鶴亀》の明治、大正時代の採譜や音源を調べたところ、明治、大正期には「メノウ」HLLと唄われており、小十郎譜も大正十三(一九二四)年では「755」のHLLで、昭和八(一九三三)年で「575」LHLと改訂している。つまり、HLLで唄う方が伝統的な唄い方で、LHLが新しい唄い方といえる。「メノウ」の京阪式アクセントは室町時代からHLLで、東京アクセントが金田一氏もいうようにLHLからHLLと変化をしている。新しい小十郎譜には十七箇所相違があり、そこには京阪式アクセントから東京アクセントに改めたことがうかがえる。小十郎譜の改訂については、長唄が劇場音楽から離れ、独立した演奏をするようになった際に、本居長世や半井桃水などの助言によって東京アクセントを取り入れて唄うようになったためと推測される。つまり、長唄も古くは京阪式アクセントで唄われていた曲があることになる。

また、配川美加・坂本清恵(二〇一七)「長唄《京鹿子娘道成寺》に撰取された謡―旋律とアクセント―」『日本女子大学紀要 文学部』67では、長唄《京鹿子娘道成寺》のうち、能の詞章を取り入れた「中啓の舞」と「鐘入り」を検討し、長唄《京鹿子娘道成寺》が作曲された頃に近い享保期の謡には京阪式アクセントが強く残っていて、長唄の「鐘入り」

には唄も三味線も上方のアクセントが残っていることを明らかにした。しかし、「中啓の舞」では、唄も三味線も上方の影響が少なく、曲節による違いもあることが確認できた。また、小十郎譜の大正八年と大正十三年の比較で、唄では京阪式アクセントから東京アクセントに合わせた改訂をしていることもわかった。この研究からは、三味線の旋律に京阪式アクセントが伝承されていることも明らかになった。

本稿では、これまでの研究をさらに進めるため、江戸時代の長唄の旋律を残す一節切『糸竹五色貝』（文政元年板行）に譜が残る《相生獅子》と同じ詞章を持つ《英執着獅子》と、金田一氏が用例を多く挙げている《越後獅子》についてその反映するアクセントについて検討を行うこととした。

なお、『糸竹五色貝』については、高桑いづみが、二〇一七年度日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画「長唄における獅子物―二つの系譜―」において、「能楽系の獅子―一節切から蘇るクルイの古譜―」での「能楽の獅子と長唄のクルイ」の発表で、文政年間の《相生獅子》と《英執着獅子》で共通する部分のフシが現行と同じであると明らかにした。

二 《英執着獅子》の詞章と音楽

《英執着獅子》は、宝暦四年（一七五四）三月より江戸中村座で上演された『百千鳥艶郷曾我』第三番目に初代中村富十郎（一七一九〜八六）が踊った長唄である。作曲者は、その時のタテ三味線、初世杵屋弥三郎と考えられる。作詞者は不明だが、それより前の正徳・享保期（一七一〜一三六）頃に大坂で刊行された詞章集『古今端哥大全』所収の《石橋》

や《番獅子》の詞章と似ている。このうち《石橋》は地歌《石橋》として伝承され、音楽もよく似ている（《英執着獅子》の詞章のうち、□で囲んだ部分が《石橋》と共通）。

この地歌《石橋》については、『歌系図』（天明元年「一七八一」刊）に「芳沢金七・若村藤四郎両調・瀬川路考歌」とある。つまり、地歌《石橋》は、初代瀬川菊之丞（路考は俳名）が作詞し、芳沢金七と若村藤四郎が作曲して、初代菊之丞が上方で踊った曲が地歌に残ったもの、と考えられる。

では、初代菊之丞が上方でこの曲を踊ったのはいつのことであろう。芳沢金七は京都の芝居で享保七年（一七二二）〜宝暦二年（一七五二）頃に活躍した三味線方、和歌村藤四郎は同じ京都で宝永四年（一七〇七）〜延享三年（一七四六）頃に活躍した唄方であることが、前島美保氏の『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』（平成二十三年度東京芸術大学博士学位論文）で明らかにされている。また、初代瀬川菊之丞（一六九三〜一七四九）は上方の役者で、享保十五年（一七三〇）冬初めて江戸に下り、元文二年（一七三七）冬に上方に里帰りしている。『古今端哥大全』が正徳・享保期までに大坂で刊行されたとするなら、地歌《石橋》は初代菊之丞が最初に江戸に下る享保十五年冬より前に上方で踊った曲が地歌に残ったことになる。ただし、その具体的な上演を確認するのは難しい。なお、初代菊之丞は、最初の江戸滞在中、享保十九年（一七三四）三月頃に江戸中村座で《相生獅子》を踊り、《相生獅子》にも地歌《石橋》や長唄《英執着獅子》と共通の詞章（《英執着獅子》の詞章のうち、傍線・二重傍線）や音楽の部分がある。

一方、『古今端哥大全』の成立年代に元文期も含まれるとすれば、地歌《石橋》は、初代菊之丞が上方に帰って元文三年（一七三八）三月に

京都早雲座で上演された『妻夫獅子衛総角』のうち、菊之丞が踊った「し、のしよさ」の音楽である可能性が出てくる。その時の詞章は不明だが、金七と藤四郎が共にタテを勤めたことが確認できるのは遅くとも元文四年（一七三九）の顔見世からなので、それより少し前の元文三年三月であつた可能性は高い。

初代菊之丞は寛保元年（一七四一）冬に江戸に戻ると、翌年の寛保二年四月に市村座で《枕獅子》を踊った。《枕獅子》は本名題を《英獅子乱曲》^{しのりぎょく}と言ひ、やはり地歌《石橋》や長唄《英執着獅子》と共通の詞章（《英執着獅子》の詞章のうち、波線部分・二重傍線）や音楽部分がある。

本曲《英執着獅子》を初演した初代中村富十郎（二七一九〜八六）も上方の役者で、元文三年（一七三八）五月大坂角の芝居（岩井半四郎座）で《富貴草都妻獅子》を踊っている。その二か月前に菊之丞は京都で「し、のしよさ」を踊っているので、富十郎は当然菊之丞の舞台も観ていたのであろう。その後も富十郎は何回か獅子物を踊り、宝暦二年（一七五二）に三十四歳で初めて江戸に下り宝暦四年に本曲を初演。初演は大当たりで六月まで大入りが続いたらしい。

なお、『古今端哥大全』所収《番獅子》も本曲《英執着獅子》と詞章が似ている（《英執着獅子》の詞章のうち、網掛け部分）。『歌系図』に《番獅子》の作詞・作曲者についての記載は無いが、菊之丞が元文三年（一七三八）三月京都早雲座で踊った「し、のしよさ」の曲である可能性があり、富十郎が同年五月大坂角の芝居（岩井半四郎座）で踊った《富貴草都妻獅子》、またはその後も何回か踊った獅子物の可能性もありそうだ。

以上をまとめると、例えば次のような順で獅子物が上演された可能性

が考えられる。

享保十九年（一七三四）三月頃江戸中村座 菊之丞《相生獅子》
元文三年（一七三八）三月京都早雲座 菊之丞の「し、のしよさ」
（地歌《石橋》）

元文三年（一七三八）五月大坂角の芝居 富十郎

《富貴草都妻獅子》（《番獅子》）

寛保二年（一七四二）四月江戸市村座 菊之丞《枕獅子》

宝暦四年（一七五四）二月江戸中村座 富十郎《英執着獅子》

こうして菊之丞の獅子物が再演ごとに少しずつ詞章を変え、後輩の富十郎にも受け継がれてやはり再演ごとに少しずつ形を変えたため、詞章や音楽に共通部分を持つ獅子物の各曲が成立したのではないだろうか。また、結果として《英執着獅子》はそれらの集大成となり、今日まで名曲として残ったのではないか。

◎詞章

※傍線は《相生獅子》、波線は《枕獅子》、二重傍線は《相生獅子》《枕獅子》、□は地歌《石橋》、網掛けは《番獅子》との共通部分。（一）

内は小十郎譜の詞章。

～花飛び蝶驚けども人知らず

～我も迷うや様々に 四季折々の戯れは 蝶よ胡蝶よせめて暫しは手に止まれ 見返れば花の小陰に見えつ隠れつ羽を休め 姿優しき夏木立

①～心尽しのなこの年月をえ いつか思いの晴るるやと 心一つにあき

とも共通する部分である。稿末の表にまとめたとおり、小十郎三味線譜が最も京阪式アクセントを反映した旋律になっている。また、最も東京アクセントに近いものが小十郎唄譜とすると、徐々に京阪式アクセントから東京アクセントの影響を受けて唄い方が変わったとみてよい。

此の年 月を元

小十郎譜

「年月」は京阪式アクセントHLLLLであるが、『糸竹五色貝』、小十郎三味線譜、長唄稀曲譜はHLLLLで、小十郎唄譜が東京アクセントLHLLを反映している。

何時か 夢ひの

小十郎譜

「いつか思いの」は小十郎三味線譜と長唄稀曲譜がLHLLHLLLで、京阪式で実現している。小十郎唄譜はHLLHLLHLLで東京アクセントである。

心ひとつに

小十郎譜

「心ひとつに」は、小十郎三味線譜、長唄稀曲譜がHLLHLLLHLLLで京阪式アクセントであり、『糸竹五色貝』もHLLHLLHLLと「ひとつ」がLHLLの京阪式アクセントを反映しているとみてよい。これに対して小十郎唄譜はLHLLHLLLと東京アクセントである。

② 「露東雲の獅子の駒」地歌《石橋》

こも地歌を取り込んだ部分である。小十郎三味線譜には京阪式アクセントの高低と一致する旋律が多いが、唄には京阪式アクセントがほとんどみられない。

耳を伏せ

小十郎譜

「耳を伏せ」は小十郎三味線譜HLLHと京阪式アクセントである。これに対して小十郎唄譜はLHLLH、東十郎もLHLLLで「耳を」は東京アクセントである。

花に宿借る

小十郎譜

「花に宿借る」は、小十郎三味線譜がHLLHLLHLLで京阪式を反映する。東十郎の唄はLHLLHLLHLLで、「花に」は東京アクセントだが、他は京阪式である。小十郎唄譜はLHLLHLLHLLで、第一類動詞「借る」HLLが、東京では一段活用になってしまっているために、京阪式アクセントを反映しているものとみられる。

③ 「時しもうち忘れ」《枕獅子》《番獅子》地歌《石橋》

地歌の詞章であり、かつ《枕獅子》《番獅子》の詞章と重なる部分がある。

牡丹の花の

小十郎譜

「牡丹の花の」は小十郎三味線譜がH L L L H L L L H L L Lで京阪式アクセント、小十郎唄譜がH H H H L L H L L Lで「花」が東京アクセントである。

花見 虎ろ

ハ ア マ リ ト ヴ ヲ ヲ ト ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト ヲ ト

小十郎譜

「花見て戻ろ」は小十郎三味線譜がH L L L H L L H L Lで「花見て」は京阪式、小十郎唄譜はL H H L L L H L L H L Lで東京アクセントである。

三味線も東京アクセントが少々入るが、唄ほどではない。

④ 「牡丹に戯れく新たなり」《相生獅子》《枕獅子》地歌《石橋》

ここも地歌を取り入れ《相生獅子》《枕獅子》と詞章が共通する箇所である。

有様は

ハ ア マ リ ト ヴ ヲ ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト

小十郎譜

「有様は」は小十郎三味線譜、稀曲譜、『糸竹五色貝』ともにH L L L Lで京阪式アクセントを反映、小十郎唄譜のみL H H H Hで東京アクセントである。

花降り

ハ ア マ リ ト ヴ ヲ ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト
 ナ ツ シ ヲ ト ヲ ト

小十郎譜

「花降り」は、小十郎三味線譜H L L L H、『糸竹五色貝』H L L L Lで京阪式アクセントを反映している。小十郎唄譜はL H L L Lで東京アクセントである。

トである。

以上、地歌を取り込んでいる詞章部分の旋律をアクセントとの関係から検討を行ったが、作曲時に三味線の旋律に合わせて唄ったとすれば、京阪式アクセントで詞章も作曲されていた可能性が強い。一節切の旋律を示した『糸竹五色貝』も京阪式を留めていることが分かる。これに対して小十郎唄譜は東京アクセントに変更を行ったものと考えてよいのである。

四 《越後獅子》の詞章と音楽

《越後獅子》は、文化八年（一八一二）三月十五日より江戸中村座『年々歳々沙石川』第二番目大切に三代目中村歌右衛門が踊った七変化《遅桜手爾葉七字》の第四曲として初演された。

作曲者はその時のタテ三味線、九世杵屋六左衛門と考えられる。

作詞者は、狂言作者「篠田金次」（浅川玉兔『長唄名曲要説』一九五六年、私家版）、狂言作者「松井幸三」（平凡社『日本音楽大辞典』一九八九年、平凡社）、タテ三味線「九世杵屋六左衛門」（古井戸秀夫『舞踊手帖』二〇〇〇年、新書館）といったいくつかの説がある。

このうち「篠田金次」は、『歌舞伎新報』五二八号（明治十八年「一八八五」四月）所収「俳優叢談」○中村歌右衛門の伝（前号の続）で作詞者を「並木五瓶」としているのが根拠になったと考えられる。この五瓶は二世並木五瓶のことで、本曲成立時は「篠田金次」であった。また、「松井幸三」は長唄正本の表紙に「狂言作者 奈河篤助 松井幸三」として出ているのが根拠だろう。歌舞伎における長唄の作詞は狂言作者

が行った、とするのが現在も一般的な考え方だ。ただ、正本には二名挙げられているのに、どうして「松井幸三」に限定されるのがよくわからない。

一方、「杵屋六左衛門」とするのは、『遅桜手爾葉七字』初版正本のうち、上の一曲目《傾城》と下の一曲目《橋弁慶》の内題下に「杵屋六左衛門述」とあるのが根拠であろう。「述」は作詞者の意味で使われてきた。《越後獅子》は上の四曲目なので内題下に「杵屋六左衛門述」とは書かれていないが、一曲目《傾城》の述の記載がここにも引き継がれたと考えられる。また、歌舞伎における長唄の作詞をタテ三味線も行っていたことは、享和三年（一八〇三）に成立した『三座例遺誌』にも「浄留理の文句独吟のめり安ハ狂言作者より作りて渡す。長うた所作の文句ハ雖子町の立三味線これを作る事也。然れとも狂言にか、ハリたる所作又拍子舞等ハ作者是をつくる」と記されている。正本に狂言作者の名が出ているのは、変化舞踊にも台本があり、台本を書いたのが狂言作者だったからである。従って、作品全体の趣向は狂言作者によるものと考えられる。

《遅桜手爾葉七字》の成立については、前出「俳優叢談 ○中村歌右衛門の伝（前号の続）」に詳しい記載がある。筆者は中村秀鶴（三代目中村仲蔵「一八〇九〜八六」）の俳名。ただし、『遅桜手爾葉七字』が初演された文化八年、筆者は数え年三歳であった。従って、この記事の内容は伝聞によるものであろう。また、この記事を書いたのは筆者が数え年七十六歳の時で、郡司正勝が『手前味噌』（青蛙房、一九六九年）の解説で述べているように、「聞き伝えの誤り」「記憶の誤り」があるため、全面的に信頼できるわけではない。

そこで、この記述を基に、現存資料と照合した上で訂正を加えてまと

めると成立状況は以下になるだろうか。

文化八年（一八一二）三月、江戸市村座で三代目坂東三津五郎が七変化《七枚続花の姿絵》を踊って大入りを取ると、歌右衛門も七変化を踊りたいと強く希望し、初日から五日経っていたので、すぐに狂言作者が段取りをつけ、七変化《傾城》《座頭》《業平》《越後獅子》《橋弁慶》《相模蟹》《朱鐘馗》を出すことになった。ただし、『傾城』《座頭》は「有もの」で残りの曲を一夜で作詞すると、立三味線が一夜で作曲し、次の一夜で振をつけて翌日には初日を出した。このように準備期間が短かったにもかかわらず、全体に評判が良く大成功を取めた。

実は、三代目三津五郎の《七枚続花の姿絵》でも、七曲のうち《源太》と《猿廻し》は三津五郎が文化五年十一月森田座で踊った七変化《倭仮名色七文字》のうち同名曲を二曲そのまま使っている。しかし、歌右衛門はこの時が初めての变化舞踊だったので、そのまま使える曲がなかった。そのためか、『傾城』や『座頭』は「有もの」と言っても先行曲そのままではなく、アレンジされている（『邦楽の友』令和元年九月号に詳細あり）。このほか『業平』『越後獅子』『橋弁慶』『相模蟹』も先行曲のアレンジになっていて、急ごしらえだったことは十分うかがえる（『邦楽の友』令和元年十月号・十一月号に詳細あり）。

ただ、他の曲が先行曲を部分的に丸ごりしているのに比べると、『越後獅子』はもう少し複雑な取り入れ方になっている。名曲として演奏されてきた背景にはこうした引用の巧みさも関わっているのかもしれない。

そこで、『越後獅子』における先行曲の引用状況についてまとめると、次の詞章のようになる。傍線は、地歌《越後獅子》（寛政元年「一七八九」『古今集成琴曲新歌袋』に初出）の詞章と共通する部分。太字は音楽で

も共通する部分。波線は地歌《さらし》(宝暦元年「二七五二」)『糸のしらべ』に初出)の詞章と共通する部分。このほか、冒頭の前弾とへ打つや太鼓く石橋の」は富本《鞍馬獅子》でお厩の喜三太の登場に使うへ諸国巡りに」の前の合の手からへ襟にかけたる」までの旋律をアレンジしたものと考えられる。

◎詞章

三下り

へ打つや太鼓の音も澄み渡り かくべくと招かれて 居ながら見する
石橋の 浮世を渡る風雅者 歌うも舞うも囃すのも 一人旅寝の草枕
おらが女房を誉めるじゃないが 飯も焚いたり水仕事 麻よるたびの
楽しみを 一人笑して来りける

へ越路がた お国名物はさまざま有れど いなか訛の片言交り しらう
さになる言の葉を 雁の便りに届けてほしや 小千谷縮のどこやらが
見えずく国のならいにや 縁を結べば兄やさん 兄じゃないもの夫
じゃ物

へ来るか来るかと浜へ出てみれば ノウほいの 浜の松風音やまさるさ
やつとかけのほいまつかとな
へ好いた水仙好かれた柳の ほいの 心せきちく気はやもみぢサ やつ
とかけのほいまつかとな へしんく甚句もおけさ節

へ何たら愚痴だえ 牡丹は持たねど越後の獅子は 己が姿を花と見て
庭に咲いたり咲かせたり そのおけさに異な事言われ ねまりねま
らず待ち明かす ござれ話しましょうぞこん小松の陰で 松の葉のよ
にこんこまやかに く 弾いて唄うや獅子の曲

へむかい小山の糸竹竹 いたぶし揃えてきりをこまかに十七が 室の小

口に昼寝して 花の盛るを夢に見て候

見渡せば見渡せば 西も東も花の顔 いづれ賑う人の山人の山
へ打寄する打寄する 女浪男浪の絶間なく 逆巻く水の面白や面白や
へさらす細布手にくるくると さらす細布手にくるくると いざや帰ら
んおのが住家へ

五 《越後獅子》のアクセント

ここでは、以下の八種類の音源を使って比較を試みた。

A 唄 六世芳村伊十郎 (二八五八〜一九三五)、三味線 杵屋勝吉・
三世杵屋栄藏 (二八九〇〜一九六七)、囃子 初世か二世望月太喜藏・
三世福原鶴三郎 (一八七三〜一九三九)

B 唄 五世富士田音藏 (一八七四〜一九二八)、三味線 四世杵屋佐
吉 (一八八四〜一九四五) ※ニッポノホン、明治四十四年六月

C 唄 八世岡安南甫 (一八七四〜一九二五)、三味線 十三世杵屋六
左衛門 (一八七〇〜一九四〇)・五世杵屋勘五郎 (一八七五〜一九
一七)、笛 初世か二世望月太喜藏、小鼓 七世望月太左衛門 (一
八六二〜一九三八)、大鼓 二世望月長左久 (後)、八世太左衛門、
一八九一〜一九二六)、太鼓 十世田中伝左衛門 (一八八〇〜一九
五五)

D 唄 四世吉住小三郎 (後)、吉住慈恭、一八七六〜一九七二)、三味
線 三世杵屋六四郎 (後)、稀音家浄観、一八七四〜一九五六)、杵
屋六次 (後)、山田抄太郎、一八九九〜一九七〇)

※ニットー、大正十四年十月十九日吹込

E 唄 四世松永和風（二八七四〜一九六二）、三味線 初世杵屋五三郎（一八八九〜一九三九）・杵屋勝丸（二八九八〜一九三二）、囃子 三世梅屋勘兵衛（一八八二〜一九四六）社中

F 唄 三世松島庄三郎（？〜一九四六）、三味線 初世杵屋勝松（一九〇一〜一九三九）・六世杵屋巳太郎（一九一三〜一九五四）、笛 堅田喜三次郎、小鼓 堅田栄之助、大鼓 二世望月太意次郎（後、四世藤舎呂船、一九〇九〜一九七七）、太鼓 望月天津雄

G 唄 九世芳村伊四郎（後、七世芳村伊十郎、一九〇一〜一九七三）、三味線 三世杵屋栄藏（二八九〇〜一九六七）・杵屋栄次郎、囃子 八世田中佐太郎（後、十一世田中伝左衛門、一九〇七〜一九九七）社中

H 唄 十四世杵屋六左衛門（一九〇〇〜一九八一）・杵屋喜三郎・杵屋六七郎 三味線 杵屋勘五郎・杵屋六郎助・杵屋六藏 鳴物 望月太左衛門社中

※キング、昭和十六年一月二十三日録音
 ※ビクター、平成九年四月発売

《越後獅子》については、金田一（一九四三）では、

歌詞のアクセントはボタンワモタネドエチゴノシシワ・オノガスガタオハナトミテである。譜と比較すれば高起式のアクセントをもつボタンワ・シシワ・スガタオ・ミテには何れも高く初まる旋律が配され、低起式アクセントをもつモタネド・エチゴノ・オノガ・ハナトには何れも低く初まる旋律が配されてゐる。斯くて此の曲の「弾いて歌ふや獅子の曲」までの二十三句の中、アクセントに逆つて旋律がつけられてゐるものが一つもないのである。

と東京アクセントとの一致を強調する。どのように二十三句を数えたのかは不明である。確かにこの部分については、唄については、京阪式アクセントの反映をみる事がほぼなく、強いてみれば「ねまり」をHHLとする唄い方、「咲いたり」「おけさに」「言われ」が東京アクセントではない。

牡丹は持たねど
 小十郎譜

明治 37 年 北村季晴氏採譜

昭和 18 年 金田一春彦氏採譜

[例 21]

この部分確かに小十郎唄譜は、金田一氏の指摘どおり「牡丹は持たね

ど」がH L L L L H L L L Lである。右の囲みの上部の五線譜は明治三十七年の北村季晴氏採譜の唄と三味線の譜であるが、演奏者は不明である。唄は下の金田一春彦氏採譜の小十郎譜同様にH L L L L H L L L Lで東京アクセントである。しかし、三味線譜はL H H H L H L L Lである。この三味線の旋律で唄うのがE四世松永和風である。この部分については、稿末の表《越後獅子》に一覧で示したとおり、四世松永和風を除けば、唄のアクセントに揺れがない。金田一氏指摘の次の東京アクセントに外れる例と同様になろう。

金田一氏は次のように旋律が演奏者によって相違することを取り上げている。

も一つ長唄に就て注意すべきは、歌ふ人によつて語句のアクセントに近い節で歌ふ人と、さうでない節で歌ふ人とがあることである。例へば吉住小三郎氏の長唄と、松永和風氏の長唄とを比べると和風氏の歌ひ方は、あまりアクセントに拘泥しない歌ひ方のやうである。例へば両氏が歌ふ「越後獅子」の最初の一句を採譜すれば、例〔24〕〔25〕〔篇末参照〕のやうである。例〔24〕が小三郎氏の節（コロンビヤレコード四五〇〇A）、例〔25〕が和風氏の節（ビクターレコード一三二六六A）、東京アクセントはウツヤタイコノである。

小十郎譜

「打つや」については、東京アクセントがH L L、京阪式アクセントがL H Hとなる場所である。唄としては、A六世芳村伊十郎、E四世松永和風が京阪式アクセント、D四世小三郎、F三世庄三郎がH L Lで東

京アクセントである。この部分は三味線もH L L L Lで東京アクセントと同じ旋律である。

三味線 A 六世伊十郎
C 八世南甫 D 四世小三郎
G 九世伊四郎
E 四世和風 F 三世庄三郎

《越後獅子》は《英執着獅子》に比べると京阪式アクセントで唄われてきたとは言いがたい。詞章にも方言が出てくるので、京阪式アクセントで唄うことがなかった可能性もある。ただし、小十郎譜以前には東京アクセントでない唄い方も混在していることも確かである。

なお、へ来るか来るか「おけさ節」は浜辺の情景を唄った「浜唄」と呼ばれる部分で、一曲の聞かせどころでもある。三味線が「トーンテチン」という波を表す旋律を繰り返す部分が多く、三味線にも唄いにもアクセントはあまり反映されていないが、これも演奏者によって違いが見ら

れる。特に、「トーンテチン」を繰り返してそこにへ来るか来るかと浜へ出て」を唄い込む時、表間で出るやり方と裏間で出るやり方の大きく二種類の唄い方がある。表間で唄う場合は、「トーンテチン」の「トーン」を聞いてから唄い出し、裏間の場合は、「トーンテチン」の「チン」を聞いてから唄い出す。Cの南甫やEの和風、F三世庄三郎、G九世伊四郎などは表間で唄っており、小三郎も明治四十三年にライロホンが発売したレコードでは表間で歌っている、その唄い方が従来だったと思われる。しかし、Dでは裏で歌い、小十郎譜も裏間で記すように、研究会関係の演奏家の間では裏間で歌うのが一般的になったようだ。小三郎が裏間で歌ったのはフシをたっぷり付けたという理由が大きいように、表間で歌う他の演奏家より「来るか」の「る」や「か」を長く装飾音も豊かにつけて歌っている。歌い出しの間を変えたのは節のためで、アクセントを意識して歌っているわけではなさそうだが、「来る」をLHの京阪式アクセントで唄うのが、C八世南甫、D四世小三郎、F三世庄三郎、十四世六左衛門で、HLの東京アクセントで唄うのが、E四世和風、G九世伊四郎である。表間で歌いだすEの和風、G伊四郎は「くる」をほぼ同じ長さで歌っており、HLのアクセントがはっきり聞き取れる。一方の小三郎は表間・裏間に関わらず「く」が短く「る」を長く伸ばして歌っており、これも結果としてLHのHを強調した歌い方になっているのが興味深い。

六 おわりに

上方で活躍した初代中村富十郎により初演された《英執着獅子》は、上方で初代菊之丞が上方で踊った曲が地歌《石橋》に残り、またその影

響下で作曲された後の獅子物の詞章を取り込んでいる。詞章が共通する部分の四か所について、旋律とアクセントの関係を見たが、初演から変わらなないと考えられる三味線の旋律には京阪式アクセントの反映をみることが出来る。また、一節切の譜を収める『糸竹五色貝』に掲載された《相生獅子》の譜にも京阪式アクセントの反映をみることができた。一方、唄の旋律は時代とともに徐々に東京アクセントに代わってしまったと考えられる。

江戸で初演された《越後獅子》については、三味線の旋律も東京アクセントを反映するものもある。多くの音源を比べると、唄に京阪式アクセントの反映と考えられるものもあり、金田一氏のいうアクセントに拘泥しない歌い方といえるのかもしれない。

長唄のそれぞれの曲の成立をみることに、上方で初演された曲などは、初演当時は、三味線譜に残る旋律同様、京阪式アクセントで唄われた可能性がうかがえる。しかし、唄い方は自由で、享受地である江戸東京のアクセントの影響で、旋律が徐々に推移をしたことがうかがえる。

参考文献

- 金田一春彦「邦楽の旋律と歌詞のアクセント」『東亞音楽論叢』昭和十八（一九四三）年
- 浅川玉兔「長唄の実技と理論 唄篇」『楽理と実技 長唄の基礎研究』（長唄友の会発行 昭和三十七（一九六二）年）
- 前島美保『十八世紀上方歌舞伎音楽の研究―囃子方を中心に―』（平成二十三年度東京芸術大学博士学位論文）
- 佐藤知乃『近世中期歌舞伎の諸相』（和泉書院 平成二十五（二〇一三）年）
- 坂本清恵（二〇一五）「長唄のアクセント―鶴亀を例に―」『論集』11
- 配川美加・坂本清恵（二〇一七）「長唄《京鹿子娘道成寺》に摂取された謡―旋律とアクセント―」『日本女子大学紀要・文学部』67

アクセントからみた長唄《英執着獅子》と《越後獅子》

表《英執着獅子》①

歌詞	小十郎唄譜	小十郎三味線譜	長唄稀曲譜	糸竹五色貝	東十郎	京(江)	京(日)	大阪	美妙	アク	放	発音	新明解	東(日)
心づくしのな	67764677*17667	777776(7)・7*3*1	UUUDUDD	UDDDUDD	DUDUDDU			4	4	4	4	4	4	
此の	6*17667	*176	DU	DU	DU	0	0	0	0	0	0	0	0	
年月をえ	2432323・7	64643・7	UDDDD	UDDD	DUUUU	3	1	1	2	2	2	2	2	2
いつか	*3*1*376	0*3*1・76・7	DUD	DUU	UDD	(2)	(2)	(2)	1	1	1	1	1	1
思の	6*1*376*17	*3*177*177	UDDDD	DUDD	DUDD	2	1	2		2	2	2	2	2
暗るやと	2443323・7	4643・7	DUDD	DUDD	UUDD	1	(0)	(0)	2	2	2	2	2	2
心	*6・7・7	1・7・777	UDD	UDD	DDD	1,2	1	1	2	2	2	2	2	2
ひとつに	674*176	7644*177	UDDDD	DUD	UUDD	(2)	2,1,(0)		2	2	2	2	2	2
あきらめん	3433323	4643234	UDDDD(余るやら)		DUUDD	0	0	4	4	4	4	4	4	3
よしや	36764	(3)*1646	DUD		DUD	(2)		1						1
世の中	4*1676432323	7*17743	UDUD		UUDD	2	2	2	2	2	2	2	2	2

表《英執着獅子》②

歌詞	小十郎唄譜	小十郎三味線譜	東十郎	京(江)	京(日)	大阪	美妙	アク	放	発音	新明解	東(日)
露	66	56	UU		(2)	(2)	1	1	1	1	1	1
東雲の	56(7)566	♭7*266566	DUUUU	2	0	0	0	0	0	0	0	0
草葉に	♭7♭7♭7♭7	*2♭7♭7*2*3*2	UUUDD	1	0	0	0	2	2	2	2	0,2
靡く	563	5653*	DUD	1	0	0	2	2	2	2	2	2
青柳の	76*16743	*17*1767*16443	UUDDD		0	0	0	0		0	0	0
糸(副詞と掛詞)	44	446糸	DD	(0)副詞0	(0)副詞1	(2)	1	1	1	1	1	1
しほらしく	6733233	7*17764332(3)	UUDD		3	4,3	3	4	4		4	4,4
二つの	67*1764674	*1777*1766667*	DUUU	2,1	2,1,(0)	2	0,2	0				3,0
獅子の	423・7	33・756	UUD		1	1	1	1	1	1	1	1
身を	♭7*36	♭7♭7*3*2*3*2	DU		0	0	0	0	0	0	0	0
なでて	7563	6565367	UUD	1	(0)	(0)	2	2	0	2	2	2
頭を	6743東京古	*176437	DUDD	2	1	2,1	0	3	3	3	3	3
うなだれ	(5)6767646	767767*17764	UUUDD	3	0	0,3	0	0	0	0	0	0,4
耳を	2423	64323	DUD	1	1	1	2	2	2	2	2	2
ふせ	*6・7	(3)・7・7	DD	1	(0)	(3)	2	2	2	2	2	2
花に	6♭76	*2♭7♭76	DUD	1	1	1	2	2	2	2	2	2
宿	75	56♭7*2	DU	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1
借る	63	63#4	UD	0	0		0					0
浮世の	236♭7	2323563*2♭7♭	DUUU	(0)	(0)	(0),(2)	1,2	0	0	1,0	2,0	2,1,0
嵐	6563	563*2*3	UDD	0,2	1	1,2	1	1	1	1	1	1
彼方へ	*1*1*36763	*4*3*17*3*3*3	DUDD	1,2	1	2,1,(2)	2	1	1,2	2	1,2	1,2
誘ひ	3*367	*4*3*176	DUU	0	(0),0	0	3,0	0	0	0	0	0
此方へ	6743	*17643♭76	DUDD	2,1	1	2,1	2	2	1,2	2	1,古2	1,2
寄りつ	5633	*2♭763233	DUD	0	(0),0	0	0	0	0	0	0	0
園の	*2*3*2*3	*2*3*#4*3*1	DUUU	(0)	0	1	1	1	1	1	1	1
胡蝶に	6*1767	*1*3*1767	DUUU		1	1,(3)	1	1	1	1	1	1
戯れ遊ぶ	3477333・7	4467*1776433・7	DUUUDUD	0/(0)	0/(0)						4/0	3/0
己が	677	67*164	DUU		0	0		0	0	0	0	0
友	34	464	UU	2	1	1	0,2	1	1,0	1	1,古2	1,2
呼ぶ	23・7	3・77(6)2	UD	0	0	0	0	0	0	0	0	0
獅子の	#423434	(2)3234	UDD		1	1	1	1	1	1	1	1
駒	7673223	6*7743	UD	0	1	(2),0	1	1	0,1	1	1,0	0,1

表《英執着獅子》③

歌詞	小十郎唄譜	小十郎三味線譜	京(江)	京(日)	大阪	美妙	アク	放	発音	新明解	東(日)
時しも	5666	5(6)6 b 7*26		1	1	2	2	2	2	2	2
今は	756	6566		(0)	(0)	1	1	1	1	1	1
牡丹の	b 7 b 7 b 7 b 7	*2 b 7 b 7*2*3 b	1	1	1	1	1	1	1	1	1
花の	563	656533	1	1	1	2	2	2	2	2	2
咲きや	6*1*1	2*3*17	0	0	0	0			0	0	0
乱れて	6*1674	67*1*17646	2	0	0	3	3	3	3	3	3
散るは	*1*1*1	3*1*1	0	0	0	0	0	0		0	0
散るは	676	766	0	0	0	0	0	0		0	0
散り来るは	77443	7646311	0	0	0	0		0		0	0
散るは	6*1*1	*7*1*1	0	0	0	0	0	0		0	0
散るは	676	766	0	0	0	0	0	0		0	0
散り来るは	77443	76463								0	0
ちりちり	(6)7667656	767676 b 7			(0)	1				0,1	
散りかかる	6 b 7566	b 7 b 76(56)		0	0			4		4	3
やうで	6563	b 7*263		1	1					1	
おいととして	566 b 76 b 7	5656*2 b 7 b 7									
寝られぬ	5666	b 7665611	0	0	0	0			0	0	0
花	67	*17	1	1	1	2	2	2	2	2	2
見て	767	67*16	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1
戻ろ	343	4464311		0	0	2				2	2
花	6*3	*17	1	1	1	2	2	2	2	2	2
見て	767	67*16	(0)	(0)	(0)	1			1	1	1
戻ろ	343	44643		0	0	2				2	2
花には	676*17	6766*2*3#4	1	1	1	2	2	2	2	2	2
憂さをも	*16764	*1*36744		(0),0	1	1		1		1	1
打忘れ	442323	64343223*17				2					0,5

表《英執着獅子》④

歌詞	小十郎唄譜	小十郎三味線譜	長唄稀曲譜	糸竹五色貝	京(江)	京(日)	大阪ア	美妙	アク	放	発音
牡丹に	7666	666 b 7*2	UUUU	UUUU	1	1	1	1	1	1	1
戯れ	5653	65653	UUUU	UUUU		0	0		4	4	0
獅子の	766	565	UDD	UDD		1	1	1	1	1	1
曲	56	66	DD	DD		0	0	0	0,1	0	1
げに	34	*744	DU	DU	(0)	(0)	(0)		1	1	
石橋の	4443	67643	DUDD	DUDD		0,3	0				
有様は	67777	*176737	UDDDD	UDDDD	3,2	2	2,3	2	0	2	0,2
笙歌の	*1*3*1*1	*3*#4*3*1*1	UUDD	UUDD			1				
花	67	76		UD	1	1	1		2	2	2
降り	44	46		DD	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1
簫笛	7644	7646									
夕日の	4444	746	UDDDD	UDDDD		1	1		0	0	0
雲に	32*7	232	DUD	UDD	1	1	1	1	1	1	1
聞こゆべき	23333	23233				0	0	0	0		0
目前の	7*1*1*1*1	7*1*3*1*1				0	0	0	0		0
奇特	243	643*7				0,(0)	(3)	0	0	0	0
あらた	*177	676			1,0	1	1		1	1	1
なり	7767	737									

表 《越後獅子》

小十郎謡歌詞	小十郎謡三味線	明和37年編	明和37年唄	A伊十郎	B音藏	C岡安	E和風	F庄三郎	日六左衛門	京(江)	京(日)	大坂アケ	美妙	アケ	放	発音	NHK	新明解	東(日)
牡丹江	*2 b 7 b 767	6 b 7 b 7 b 7 b 7	DUUU	UUDD	UUDD	UUDD	UUUU	UUDD	UUDD	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
持たねど	b 7 *3 b 7 *35	*3 *2 b 766	DUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUUU	UUDD	UUDD	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1	1	1
越後の	56 b 76 b 7 (6)	56 b 76 *2 b 7	DUUU	UUUU	UUUU	UUUU	UUUU	UUUU	UUUU	2	1	1,2	3	3			1,0	2,1	3,3,2
獅子は	7563	(6)56530	DUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
己が	233	22	DUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
姿を	644	4 3	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
花と	6*16	667	DUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2
見て	*167*1767	670*#4*#4	DU	UU	UU	UU	UU	UU	UU	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1	1	1
庭に	6*17*1	*3*1	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
唄いたり	*3*#4*3*176	*#4*#*#3*176	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
唄かたり	6*176432	*7*3*17643	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そこの	466	4671	DUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	(0)	(0)	0	0	0	0	0	0	0	0
おけさ	*1* *3*176	*3*176	DUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	UUDD	0	0	(2)							0
星を	64	646	UD	UU	UU	UU	UU	UU	UU	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1,0
こと	7*1	7*1	DU	UU	UU	UU	UU	UU	UU	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2
言はれ	*367643	*176430	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
ねまり	7*17	3*1*17	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU	UUU										
ねまらず	*1*3*176	*1*3*17	DUUU	DUUU	DUUU	DUUU	DUUU	DUUU	DUUU										
待ち明かす	67467432	67*1640	DUUU	DUUU	DUUU	DUUU	DUUU	DUUU	DUUU	(0)	(0)			0	4	0,4	0,4	0,4	0,4

京阪式アケセント資料

- ・「京(江)」『日本国語大辞典』第二版 小学館記載 江戸時代京都アケセント
 - ・「京(日)」『日本国語大辞典』第二版 小学館記載 現代京都アケセント
 - ・「大阪」吉原保『東京語大阪語アケセント辞典』1983年
- 参考：秋永一枝他編『日本語アケセント総合資料索引編』平成9年 東京堂出版
- 杉藤美代子『東京・大阪アケセント音声辞典』CD-ROM丸善 平成7年

東京式アケセント資料

- ・「美妙」山田美妙編『日本大辞書』明治26年10月 日本大辞書発行所
- ・「アケ」神保格・常深千里『國語アケセント辞典』昭和7年1月 厚生閣
- ・「放」日本放送協會編『日本語アケセント辞典』昭和18年1月 日本放送協會
- ・「発音」寺川喜四男・日下三好『標準日本語発音大辞典』昭和19年6月 大雅堂
- ・「明解」三省堂編修所編『明解日本語アケセント辞典』昭和33年6月
- ・「東(日)」『日本国語大辞典』第二版 小学館記載 現代東京アケセント